

Nagahata, M. & Ishikane, H. (2013). Attentional bias for body-related visual stimuli in eating disorder tendency. Vision Science Society 2013 Annual Meeting, Naples, Florida, USA.

長畑 萌

平成25年5月10日から15日の6日間、アメリカ合衆国フロリダ州ネイプルスにおいて行われた、Vision Science Society 2013 Annual Meeting (以下、VSSと記載)に参加した。当学会には、視覚研究の第一線の研究者が各国から参加するため、関連する最新の知見を獲得するとともに、参加者らと本研究の進展に有用な議論を行うことができた。

内容：摂食障害患者が歪んだボディ・イメージを持ち、身体に関する情報に注意が引き付けられることは知られている。しかし健康な人々における注意の機能と身体認知との関連についてはあまり知られていない。本研究では、摂食障害において生じる注意の偏りと同じものが健常な参加者に見られるか否か明らかにした。参加者は、10代後半から20代の女性であった。質問紙はEDI-91の下位尺度である体型不満の尺度を用いた。実験は視覚探索課題のパラダイムで行った。刺激として、身体に関する画像（身体関連刺激）、身体と関係しないニュートラルな画像（ニュートラル刺激）を用いた。刺激画像は4枚を同時にコンピュータ画面に呈示した。参加者の課題は、画面に呈示された4枚の画像が「全て同じカテゴリの画像で構成されているか」、「1枚違うカテゴリの画像が含まれているか」をキーボードのキー押しで判断することであった。このとき1枚異なるカテゴリの画像がターゲット、残る3枚がディストラクターと定義した。この課題について反応時間を記録し、また課題中の脳波について測定を行った。実験の結果、身体関連刺激がターゲットあるいはディストラクターになる条件で、ニュートラル刺激がターゲット・ディストラクターになる条件よりも反応時間が短かった。そして体型不満の得点が高いほど反応時間の差は拡大した。またERPの振幅についても、身体関連刺激が呈示される条件で体型不満との相関が見られた。これらのことから、摂食障害傾向の高い参加者において、身体関連刺激は注意の移動を促進するものと思われた。

以上が発表内容である。発表には男女を問わず様々な国の研究者が訪れ、活発な意見交換を行った。摂食障害に関するこうしたアナログ研究はまだ少なく、多くの研究者が研究の発展について強い関心を示していた。本研究については、追加データの取得および再解析を行い、現在国

際誌への投稿準備を進めている。

またVSSは世界中の視覚研究の専門家が集まる学会であり、視覚的対象認知に関する研究や視覚探索課題を用いた研究が多く発表されている。本研究に関連するトピックの最新の知見について情報収集を行うとともに、発表者と意見交換を行った。一例を挙げれば、色のプライミングによる物体の記憶への影響、テクスチャの違いにより食物の認知に生じる影響、局所情報および全体情報の視覚探索課題における利用、対象カテゴリの現実世界での大きさが視覚的注意に与える影響についての研究発表等である。色と物体認知、テクスチャと食物認知の研究は、身体や食物といった、質感や色が重要と思われる対象の認知について研究する際に重要である。また視覚探索課題を用い、刺激の布置や刺激カテゴリにより注意の働きが影響を受けることを示した研究情報は、摂食障害傾向と注意の働きについて、より正確に研究する為に有益である。特に対象カテゴリの現実世界での大きさが視覚探索に影響するという知見は、食物や身体と比較するニュートラル刺激のカテゴリ決定に際して、考慮すべき重要な情報であると思われる。このように他の研究者の発表からも多くの示唆を得ることができ、本プロジェクトにおける研究を進展させる上で有益な学会参加であった。